

禮記
近世
卷之
疑
公
家

序



俳諧近世發句類題集秋部目錄

七月 文月 立秋 今秋 秋 今秋 初秋

七夕 七夕雨 于銀河 梶象 配象 立琴

草市 草打 迎火 門火 迎鐘 于嵐尾草

送火 瓜馬 柳經 魂象 生牙魂 于紫盆

墓詣 于栞符 灯籠 盆月 盆 于地菟象

種屋象 踊 角刀 殘暑 于古扇 花火

稻象 初嵐 鳩吹 時出鷹 小鷹鴉 于一葉菟柳

木槿 于朝良 女町花 于刈萱 紫 菟袴

栞板 嘉子 于野菊 種蓼 蓼花 葛花

十六日	廿三日	有明	縣石	駒曳	駒込	旁	廿三
今日	廿日	名月	秋月	月	廿	雨月	初汐
三月	月	夕月	待宵	初月	廿九	月夜	月見
八月	八朔	呂腹糸	彼岸	初月	十六	二月	月
秋蟬	共	蛸	蟪蛄	蟪蛄	蚕	蛸	蛸
糸立虫	薄任虫	主	秋の音	秋の音	秋の音	秋の音	秋の音
鈴虫	古	松虫	藁虫	蟋蟀	蟬	い	い
葛	西瓜	芋	唐芋	秋	秋	出	出
菟糞	秋海棠	梅娘	五赤紅	さくら	花	木賊	土
獨子草	心花	雞爪	稻花	蕎麥花	芭蕉		

秋目一

露	礎	物	夜	嘆	吟
野分	芒	尾花	芦	萩	花野
秋野	秋花	草花	鬼灯	芙蓉	蓮実
瓢	布瓜	烏瓜	乙瓜	鴨	鶉
小雀	鶺鴒	渡り鳥	鶺鴒	木鬼	鶺鴒
尾越鴨	初雁	雁	秋日	秋夕	秋夜
秋雲	秋空	秋寂	秋山	秋の海	秋の水
秋風	秋風	九月	長月	牛糸	御雞餅
秋夜	秋夜	十月	菊	共	立田姫
秋夜	秋夜	零餘子	錦木	芋	芋
秋夜	秋夜	芋	芋	芋	芋

く	名木	木樨	柿	紅葉	初紅葉	紅葉
柞	新綿	新菖	鹿	すす	引板	
法水	早鳴子	鳴竿	燒帛	麻弩	落石	四一
粟	黍	稻	田刈	三新米	燒米	
新酒	新蕎麥	柚子	柿	梨子	檜木	
金柑	三推	栗	松皮	松茸	初茸	
木子	留初蛙	鯉	下築	落帖	小鱸	引
網代	打藻	堀	蒲葺	三初秋	秋の八	吳秋名
秋名	出冬	冬	近	冬	九月	是

秋目二

俳諧近世叢句類題集秋部

七月 文月

江戸雀堂来曾編

七月 文月 草花上 不羅
 文月 下 山 洞 心 晴 子 三 九
 文月 下 子 休 心 連 某 海 首 三
 文月 下 草 心 心 心 龍 心
 文月 下 心 心 心 心 心 心 心
 文月 下 心 心 心 心 心 心 心

子布か人の世にこそおのれ
さるる市をさるるのさるる
奇劇

夢虎

世の中のとこしものさし折ると
果つこれおのれこそ
五明

迎々

おつひやち書かお書かおのれ
さるるや書かおのれも又待し
おつひやち書かおのれも又待し
つやちおのれ

三六

完来

つやちおのれ
さるるや書かおのれも又待し
葛

鹿をさる

おつひやち書かおのれも又待し
さるるや書かおのれも又待し
未嘗

灰馬

魚も傷も存の道具とて灰の
窓松

柳臣

柳臣の流やるはらうの音
さるるや書かおのれも又待し
當英

對行

當英

五月

一歩のついでにやまのやまの灯籠 成美
白貴の切糸灯籠やおの夜 完美

人の夢の能のまのくまの月 可登

ねのよめなまのまのまの月 士羽

まの月 舞のまのまのまの月 大石

まの月 舞のまのまのまの月 完未

大石のまのまのまのまの月 葛之

人列の雀まのまのまの月 三六

秋五

五

五

舞のまのまのまのまの月 三六

まのまのまのまのまの月 士羽

まのまのまのまのまの月 三六

地蔵宗 積るま

地蔵宗のまのまのまの月 井眉

佛射山や舞のまのまの月 未嘗

まのまのまのまのまの月 三六

まのまのまのまのまの月 大石

まのまのまのまのまの月 三六

稲妻の雨の雲の雀の神の一人
以て今も此の地を治す今昔
山々此の稲妻の雲の海の上
に翫 駕吹

つとねの人の猫の尻の神の一人
こゝろの地を治す今昔
鳥の神の神の神の神の神の神
樹の神の神の神の神の神の神

山背の神の神の神の神の神の神
芒の神の神の神の神の神の神
三子

秋七

一系

相一系系神の道を治す今昔
とてやれ今も此の地を治す今昔
春の神の神の神の神の神の神
一系神の神の神の神の神の神
桐の神の神の神の神の神の神
神の神の神の神の神の神の神
昔の神の神の神の神の神の神
馬車
最神

本権

ちる柿箱の匂ひのせむる白

おるふ花乃露やとく本権 三六

こころなしくとくそり花本権 可致屋

物のもく二る乃ぬた必本権 成美

多し枝も花をひまなき本権 崇介

海芽さくふぬや本権の元まき 乙二

大酒くそる甲しあましく白本権 三六

りこつらんるなせりも本権 木僊

二序と度本権 水きぬ酒なき白 星澄

秋八

景

折るふてまのこまる本権 聖雄

正りくくとお鳥りそく垣板 乙二

お鳥や只一端りあたりし 可致屋

お初も日くくさる糸片折戸 三六

あまののたうはほき料理が 卓也

お初もあつたの旭の光 景光

おるる舟りそる人通り 定本

おるるるおるるぬ垣の介 椿孝

季獲

女部元

新白作人乃のける夢の先 志雅
景や我七あき山の先仲る 崑外
新ふるく霞と新く流りき 万和

独りなくまのしる女部元 士訓
世にわさきのさるをいふ人 幸元
あまのよみかた元斗りく 牛心
くまのくまかみ元女部元 成美
敗醬都りまのめえたりり 士訓
女部元月くかたらは志ぬ人 可成里

秋九

刈草

小折るるん刈草も巾 女部元 大和丸
草乃中のまをいひのをいふ人 完末
女部元志あふのまはをいふ人 素壁
月くくくか人のまらるる女部元 羽澤川

刈草おけ行畑黄ふしうふ那 士訓
刈草の折るまをいふ人 幸元
刈草やあふ中まおけり子 茶丸
刈草の折るまをいふ人 幽唄
うまのまをいふ人 丘高

葉

朽のりて竹ありて葉の白くは 榎也
香のりて葉の白くは 山路也 月夜

葉袴

香のりて竹ありて葉の白くは 葛三
香のりて竹ありて葉の白くは 葉袴

枯枝 密草

村雨のりて竹ありて葉の白くは 春大
香のりて竹ありて葉の白くは 土胡

野菊

秋十

野菊のりて竹ありて葉の白くは 乙二
朽のりて竹ありて葉の白くは 三彦
川にけりて竹ありて葉の白くは 乙二
画に書きて野菊のりて葉の白くは 乙二

穂葉 葉花

香のりて竹ありて葉の白くは 未曾
香のりて竹ありて葉の白くは 未曾

葛花 竜膽

香のりて竹ありて葉の白くは 乙二
香のりて竹ありて葉の白くは 乙二

秋海棠 梅

竹海棠 佛はまのさき 首三

早のさきとらりしきさき梅は 未嘗

吾亦紅 くらゐ

少のさきとらりしきさき梅は

たのさきとらりしきさき梅は

木賊

竹のさきとらりしきさき梅は 土明

只のさきとらりしきさき梅は 未嘗

狗子草

大のさきとらりしきさき梅は 乙二

ぬのさきとらりしきさき梅は 成美

ぬのさきとらりしきさき梅は ちさ

芝花

登のさきとらりしきさき梅は 榮花

山伏のさきとらりしきさき梅は

大のさきとらりしきさき梅は 乙二

麻のさきとらりしきさき梅は

し鳥のさきとらりしきさき梅は 三考

雞歌

新田よりほるもあまのついでに
新田よりほるもあまのついでに
新田よりほるもあまのついでに
新田よりほるもあまのついでに
新田よりほるもあまのついでに

稲の元

湖よりあまのついでに
湖よりあまのついでに
湖よりあまのついでに
湖よりあまのついでに
湖よりあまのついでに

昔の元

石よりあまのついでに
石よりあまのついでに
石よりあまのついでに
石よりあまのついでに
石よりあまのついでに

秋五二

のどくしと温純
のどくしと温純
のどくしと温純
のどくしと温純
のどくしと温純

芭蕉

臨あつし日向あまのついでに
臨あつし日向あまのついでに
臨あつし日向あまのついでに
臨あつし日向あまのついでに
臨あつし日向あまのついでに

芭蕉

あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに
あまのついでに

虫

虫の音も目も波もかきく為也一 蝶字

くまの音もかきく為也一 蝶字

ちの音もかきく為也一 蝶字

ちの音もかきく為也一 蝶字

ちの音もかきく為也一 蝶字

松

松の音もかきく為也一 蝶字

松の音もかきく為也一 蝶字

松

秋十四

松の音もかきく為也一 蝶字

松の音もかきく為也一 蝶字

松

松の音もかきく為也一 蝶字

松の音もかきく為也一 蝶字

松

松の音もかきく為也一 蝶字

松の音もかきく為也一 蝶字

松の音もかきく為也一 蝶字

松の音もかきく為也一 蝶字

陣

羊膏... 未嘗

陣... 一草

陣... 五明

陣... 葦堂

竈馬 蘇之虫 摩位虫

... 五明

... 卒心

... 恒九

... 丈左

秋十五

牝の管

... 完素

... 敵休

... 玉智

牝の物

... 大石

... 丈左

... 雨塘

... 三才

牝尾

掃屋がけしきのぬれの境 葦亭
毛のしりぬきとるぬれの境 あり

牝
牝

牝の標ありしも路なきのふ 士朗
早しうしものしりぬきぬれの標 定美
牝のふもをけしきわんしりぬき 可羅里
あまの標しりぬきぬきの標 成美
あまの標しりぬきぬきの標 午心

牝
牝

牝乃羽のしりぬきぬきの標 眞々

牝乃標しりぬきぬきの標 卓池

牝

日くしりぬきぬきの標 三光
牝乃標しりぬきぬきの標 定美
日くしりぬきぬきの標 未嘗

牝
牝

牝乃標しりぬきぬきの標 士朗
牝乃標しりぬきぬきの標 定美
牝乃標しりぬきぬきの標 未嘗
牝乃標しりぬきぬきの標 乙二

瑞輝

瑞輝の鼻つきは極う孔 葵亭
〜其の早急なり〜 一茶

老書

川よき瑞輝は下馬 三才
梅階乃あり 未嘗

如由きの染もあきぬ 三才

〜 舟や春の浮行 樗牛

ぬれさ〜 舟の降る 勤行

随州吟

秋十七

八月

随州吟 舟の浮〜 歸之
随州吟 舟の浮〜 未嘗

八月廿海り 舟の浮〜 士朗

舟の浮〜 舟の浮〜 牛心

八月廿〜 舟の浮〜 未嘗

八歌

八歌 舟の浮〜 舟の浮〜 未嘗

舟馬中 舟の浮〜 舟の浮〜 未嘗

八歌 舟の浮〜 舟の浮〜 未嘗

吳服寺

ふりくさちきさる乃あつ那 奇測

被岩

秘蔵寺の鳩くまきく被岩 士朗

鶴まひらひのあゆさる被岩 素尊

初月

く川舟り船堂へ戻る人 言光

初月舟鳥鴨子とく人のく 敦

初月やまのふにきしむ屋のき 光光

く川月のあまらるひてあふり 奇測

秋六

二日月

まねかきく川能きる二日月 岳路

石橋まらまきく思きる二日月 士朗

三日月 夕月

く川くまきあをゆかき二日月 可和屋

二日月まらまきくあまのき 素尊

まねねのあまきく二日月 素尊

夕月まらまきく二日月 士朗

待宵

き川舟り浦島の子のあせり 二平

之有り日也柱のほ 面 昔
 西のふひくもあきしくかきかき 三年
 初 後
 初はるも月ふくしよく
 こしはくもくもあきしくかき
 十六夜
 十六夜はくもくもあきしくかき 土
 望 既下はくもくもあきしくかき 三年

方 目

方 目 方 目 方 目 方 目
 方 目 方 目 方 目 方 目
 方 目 方 目 方 目 方 目

縣 名 野 史 野 史

旅人きりぎりすのりく 縣 名 素 變
 物 實 々 々 々 々 々 々 々 々 成 美
 花のふりさかきもももももも 標 里

可然里
 古胡
 標也
 完素
 寧松
 白

士胡
 井眉
 一茶
 年心
 完集
 成美
 乙二
 葛三
 美

持衣

新巻の巻はさしあはれ五百石古巻

秋萩の萩はさしあはれ五百石古巻

~~~~~

きぬの糸はさしあはれ五百石古巻

松竹~~~~~

いばきぬの糸はさしあはれ五百石古巻

我ららむらむらさしあはれ五百石古巻

新巻

新巻の巻はさしあはれ五百石古巻

秋廿四

~~~~~

~~~~~

~~~~~

夜寒

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~


我々もあつてひるがふ 吉胡
旅人ともあつてひるがふ 白史

小雀 鷓

秋子もあつてひるがふ 一茶

いふやうに鷓のあつてひるがふ 月 茂美

~~~~~

いふやうに鷓のあつてひるがふ 鳥 士胡

いふやうに鷓のあつてひるがふ 鳥 冥夜

いふやうに鷓のあつてひるがふ 鳥 未曾

鷓

秋廿九

さへもあつてひるがふ 乙二  
いふやうに鷓のあつてひるがふ 乙二  
あつてひるがふ 乙二  
いふやうに鷓のあつてひるがふ 乙二  
いふやうに鷓のあつてひるがふ 乙二  
いふやうに鷓のあつてひるがふ 乙二

木標

いふやうに鷓のあつてひるがふ 乙二  
いふやうに鷓のあつてひるがふ 乙二  
いふやうに鷓のあつてひるがふ 乙二  
いふやうに鷓のあつてひるがふ 乙二  
いふやうに鷓のあつてひるがふ 乙二  
いふやうに鷓のあつてひるがふ 乙二

鷓 尾越鴨







秋  
日

秋  
夕

八海舟楫のそよ風の舟の中心  
細あしの舟楫のそよ風の舟の中心

あきの目も梓ゆらぐと一瞬の命を  
三平

秋の目も志のひらゆる秋の目も  
昔と

秋の目の赤と乾きゆく秋の目も  
秋美

秋の目の赤と乾きゆく秋の目も  
本海

秋のおの目も赤と乾きゆく秋の目も  
樗牛

秋のおの目も赤と乾きゆく秋の目も  
完素

秋世一

秋  
夕

秋の目も赤と乾きゆく秋の目も  
あゝ海より上りてあきの目も  
羅城  
秋の目も赤と乾きゆく秋の目も  
暁

秋のおの目も赤と乾きゆく秋の目も  
士朝

秋のおの目も赤と乾きゆく秋の目も  
面

秋のおの目も赤と乾きゆく秋の目も  
人志ぬ

秋のおの目も赤と乾きゆく秋の目も  
昔と

秋のおの目も赤と乾きゆく秋の目も  
机の那  
暁











りきくまらぬ日やけのせむ  
唐松と文樵ふもあまの風  
枯れ乃止む露に降るもの  
我はくもくさるぬあまの風  
九日

お空をこぼれとけらる九日  
おのふもあけくさる九日  
戸障りのあふ月あふ九日  
長月

ち月のあふくさる九日

秋世四

七月のあふくさる九日  
牛車津難解

呉竹九日  
あまの心のせむの津難解

后難

あまの心  
あまの心  
清静の心  
皇陽

丹の菊子  
九日  
對竹







ほつひやうしとくもはな西の女南 菊  
うのころも菊の白きとくまし 櫻  
漏桶やまも一昔菊をよつこ 土  
菊の香や折めくも竹乃 奥  
白菊の山登りもいれもく  
くちあし菊と池ぬ茶の庭  
あやのふもいれもくもく 本  
菊もやうもくもくもく 大  
九

三田姫

三田姫 乙二

秋世六

三田姫

后月

きくくと後降后の月お那 士  
寺町の古きま冷くり后月 定  
柳乃る花落弱の心乃の月 乙  
名跡なき雨く九月の月を 昔  
后の月山里幽くもいれり 三  
後乃の月くもくもくもく 成  
后の月くもくもくもくもく 美  
后の月魂くもくもくもく 本  
后の月魂くもくもくもく 儂



都へぬる仙の居の月 なが女  
かき

常りまゝなるまゝの世に  
此のおやぢくはしむるまゝに  
そのまゝを採出せしむるまゝに

茅草

山ろく茅草更まて冷や鳥心 乙二  
山下や折捨くある茅草の枝 井眉  
月振りしむる茅草の陰 本海  
零附十

秋世七

おのゝの垣なりまゝの世に  
坊ろくまゝの世に

淨本

一まゝの世にありまゝの世に  
草乃心

そのまゝの神にありまゝの世に  
そのまゝの世にありまゝの世に  
まゝの世に  
山はくたしむるまゝの世に  
まゝの世に



赤松

赤松や木竹とては備の所 三子  
まゝ水戸の山とては園城寺 標  
赤松や日とてはとては伏 義  
之も教

本極心

赤松

赤松とてはとては赤松の首 三子  
本極心 赤松の山とては備 兩  
赤松とてはとては赤松の首 三子

秋世八

赤松

山鳥りり目とては赤松 士  
日くしとては赤松 赤松  
赤松とては赤松の首 三子

赤松

赤松とては赤松の首 三子  
赤松とては赤松の首 三子  
赤松とては赤松の首 三子  
赤松とては赤松の首 三子  
赤松とては赤松の首 三子



さすめめいしとて園に紅葉 大に凡  
唐沈く重なりしもの紅葉に 首三  
帯捨るふめはせもの紅葉に 姑等  
下をさし水やとをりたり 梅の那 定未  
非空すに能るものす 存梅 李郷

旅 新修

めくくといひくらく 旅 京 成美  
新やちやものゝ水竹の依りの 首三

新 菖

ふらたきと釣や松うささくの本 冢繹

秋 世九

石女乃深七海しめたること 年桂

唐

唯思ふめいしとて唐の音は 士明  
イはまきやあしはは唐のいし  
々も能くしるは唐の音は 士二  
唐の音は心南きらのめ音は 松  
さのいしとて唐の音は 梅也  
唐の音はしとて唐の音は 定未  
園の音はしとて唐の音は 首三  
雲川はなすも唐の音は 梅也



空のうららかな秋もあけり  
庵の明もあけり  
唐の白井もあけり  
まゝ

川板  
まゝ  
三六

人の名も業をりあけり  
麻もあけり  
深もあけり  
深も

山陰もあけり  
幽肅

こころのこころ  
湖の月もあけり  
舟もあけり  
舟もあけり  
舟もあけり  
舟もあけり

舟もあけり  
舟もあけり  
舟もあけり  
舟もあけり  
舟もあけり  
舟もあけり

舟もあけり  
舟もあけり  
舟もあけり  
舟もあけり  
舟もあけり  
舟もあけり

舟も







芦の穂のまゝにまきしり稲の秋  
夕の光の中をのろのり稲  
稲刈の中をのろのり早稲稲  
稲刈のまじり稲刈のまじり  
稲刈のまじり稲刈のまじり  
干稲のまじり稲刈のまじり  
稲刈のまじり稲刈のまじり  
稲刈のまじり稲刈のまじり

田刈

稲刈のまじり稲刈のまじり  
稲刈のまじり稲刈のまじり  
稲刈のまじり稲刈のまじり  
稲刈のまじり稲刈のまじり

秋四二

新米 穂米

新米の穂米  
新米の穂米  
新米の穂米  
新米の穂米  
新米の穂米  
新米の穂米  
新米の穂米  
新米の穂米

新酒

新酒の穂米  
新酒の穂米  
新酒の穂米  
新酒の穂米  
新酒の穂米  
新酒の穂米  
新酒の穂米  
新酒の穂米

新蕎麦

新蕎麦



新茶のまじりたる香をかりておのゝ 野山  
新茶のまじりたる香をかりておのゝ 季獲

柚子

日影し雨くちりの母柚味等の茶を飲 乙二  
柚子をさらりて飲と飲と飲と相 未嘗

柿 梨子

くちのまじりたる香をかりておのゝ柿 討行  
青柿味のりたる香をかりておのゝ柿 大見

榎梅 金梅

けしきりたる香をかりておのゝ榎梅 久藏

秋四三

金梅のりたる香をかりておのゝ 三海入

椎

旅あつち椎のあつちたる香をかりて 午心  
椎のまじりたる香をかりておのゝ椎 成美

栗

刈りたる栗のあつちたる香をかりて 辛気  
栗のまじりたる香をかりておのゝ栗 丑明

栗のまじりたる香をかりておのゝ栗 未嘗

梨 柿

ねりたる梨のあつちたる香をかりて 士洞



初君う母もさしめおむね取 末曾  
松茸 初茸

初茸と行ゆき一旅の人 素貞  
初茸もまゝに獨りてさしめ 居子  
さしめもさしめさしめさしめ 末曾  
あの子

初茸もあの子のさしめさしめ 三子  
茸れりしれれれれれれれれ 首三  
あの子もあの子もあの子も 碩布  
又ととととととととととと 五明

初 鮎  
初 鮎  
初 鮎

初 鮎  
初 鮎  
初 鮎

初 鮎  
初 鮎  
初 鮎







女暮

日のくぬぬ日りきふも女ふし 士朗  
あひまのちかかーとまの女の昏  
あまのちかか人とまのあまの暮 冥  
あまのちかか入るまの女の昏 朱紀  
あまのちかか島通るまの女の暮 士朗  
あまのちかか山入るまの女の昏  
あまのちかか西入るまの女の昏 琴元  
あまのちかか西入るまの女ふし 午心  
あまのちかか西入るまの女ふし

秋 四六

女ふし

あまのちかか西入るまの女ふし 標也  
あまのちかか山入るまの女ふし 三入  
あまのちかか島通るまの女ふし  
あまのちかか西入るまの女ふし 系原  
あまのちかか西入るまの女ふし 士朗  
あまのちかか西入るまの女ふし  
あまのちかか西入るまの女ふし  
あまのちかか西入るまの女ふし

女情

あまのちかか西入るまの女ふし 羅城



此可しといふるに掛くあるがら 寒松  
を待 みる

心をまじくしてあはれむの肯 あり  
字書もあつてとりりてしき あり

九月

不二のちの日は白雲乃九月 三十九  
限もあめ林下乃九月九月 士胡

俳諧近世發句類題集秋部畢

天地窓門環

全部二冊

天地日月風雷雨地震流火方位鬼門の辰鬼神夜  
權判地獄極樂事那那の夢の生る始女お化し温  
池水血ふる高山煙立谷音龍宮の鏡そのほり世は  
て合点のちるるの妻くくけと志はるるなり  
尤も月あつて月の光るるの水の精といふる月能  
月柱の由來おのけ返さくくくる余に誰ぞ  
此中へ入らぬといふるもお知事大お益の書なり

明袁了凡著

浪華南里亭主人増補

和陰騭文繪抄

全部二冊

東武着飾戴斗画圖

此書の陰騭と経一夫の陽報と意すれ善と  
わけて過ては余との事返さるる人切徳の  
報子よりて教の世法とて或は初負き余  
面中の身とあり又積西の聖花と清事相澤  
の相澤とけけと加見女のより安く押へも  
白良母やさんおのけのけり言はる長壽  
百半用定ふるなりゆきおと〜〜りき  
画家好士ともふる益の若書なり



